詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

スプリングコート一日持ち歩く　川崎市　折戸　洋

〈評〉予想していたより暖かい一日となり、結局はコートを持ち歩くことに。スプリングコートという呼び名がいささか懐かしい。

笹舟を追ひかけてゐる春の川　越谷市　岩永トヨノ

〈評〉ささ舟の意外な速さ。ゆるやかな流れの春の川が追いかけるという把握が説得力をもつ。

薄紙に包む簪雛納　東京　横尾　惠子

妻逝きて九年菩提樹芽吹く庭　高松市　島田　章平

水仙に朝の光の惜しみなく　前橋市　河村　葉子

夜の更けて星のささめく誓子の忌　神戸市　常澤　俶子

煙突のてっぺんに人春の雲　平塚市　日下　光代

野をゆけば草の息あり春浅し　平塚市　正好　浩

菜の花を生けて備前の壺ひとつ　日高市　秋葉ふじ子

土の香も水の匂ひも春となり　茨城　石川　昌利

小川　軽舟 選

如月やうぐひす色にさくら色　さいたま市　根岸　青子

〈評〉如月は旧暦2月。その印象を二つの色だけで表して巧みだ。この季節らしい和菓子の彩りも目に浮かぶ。

春めくや妻の怪しきフランス語　東京　野上　卓

〈評〉妻はフランス語を習い始めたのか。気分はもうすっかりパリジェンヌらしい。

蝶々のひらり母への文ごとり　加古川市　伏見　昌子

炙りたる諸子に父の酒すすむ　東京　山口　治子

五十年同じ門灯暖かし　香芝市　山本　合一

洗礼の赤子眠るや郁子の花　ドイツ　広谷　朝子

夜勤終えまた夜勤日や朧月　須崎市　野中　泰佑

カトラリー並ぶテーブル春隣　見附市　岡村　文子

ポシェットに着信音や春の雨　秦野市　相良　研二

路線バス乗客ふたり春の宵　長岡市　窓井　まり

西村　和子 選

柔らかき光放ちて硝子雛　大阪市　浜崎美智代

〈評〉ガラスの光は鋭く冷たいが、この場合は曲面が多く柔らかな印象を受けたのだろう。変わりびなのひとつと思われる。

クローバー遠くで母が呼んでいる　河内長野市　守口　幸子

〈評〉クローバーが一面に咲いているのを見ると子供の頃が思い出される。母の声は幻聴。

その人の黒うつくしき春の服　雲南市　熱田　俊月

林中に隠れ家めきし梅の茶屋　葛城市　八木　誠

靄立てる山より春の立ちにけり　島根　高橋多津子

日に雨に膨らむ岸の猫柳　羽生市　岡村　実

紙テープ伸びて千切れて島の春　東久留米市　矢作　輝

濡れ縁に鶏上がりゐて長閑けしや　東京　山口　照男

日向ぼこ幸せそうな愚痴一つ　神奈川　新井たか志

猫抱けば日向の匂ひ日脚伸ぶ　甲府市　山田　敦子

井上　康明 選

雲の上雲の中ゆく春の夢　大阪市　吉田　昌之

〈評〉夢の中で羽が生えた作者は、とらえどころのない雲の間を飛んでゆく。快い一瞬の春の夢は、つややかだがはかなく過ぎる。

花冷えや東京行きの切符買ふ　甲府市　清水　輝子

〈評〉桜が咲くうすら寒い日、東京行きの切符を買う。華やかな東京への思いを胸に秘めながら。

山の寺南天の実は海知らず　久留米市　持地　恒美

春一番気ままにをどるレジ袋　宝塚市　大曲富士夫

志高くと答辞卒業す　東京　茶　茶

まだ人の怖さも知らず雀の子　湖西市　宮司　孝男

涅槃西風大口開けて泣く羅漢　藤枝市　山村　昌宏

様々な握手を交はし卒業す　東久留米市　夏目あたる

鬱々と糠雨つづき二月果つ　北九州市　土居　康二

暖かや石見訛りの人とゐて　雲南市　熱田　俊月

伊藤　一彦 選

勲章より脚ある方がよかったと虚ろに語るロシアの兵士　つくば市　小林　浦波

〈評〉ウクライナからの帰還兵の言葉に表

たましひは羞づかしがりや目をやれば亡夫の寝息はきつと止むらん　大阪市　森川　慶子

〈評〉亡き夫が黄こいるような気がしこり

助詞だけを並べて意味を成すような　ジュ・トゥ・ヴ　すこし唇を閉ざして　武蔵野市　北谷　雪

〈評〉「ジュ・トゥ・ヴー（あなたが欲し

遺伝子という猛禽がわたくしを系統の樹のこずえに落とす　堺市　石井　藍

〈評〉遺伝子によって、系統樹の最

米川千嘉子 選

加藤　治郎 選

水原　紫苑 選

こちらから投稿できます

うたは奏でる　コロナ禍と学校

染野太朗

私が中学と高校の教員だったのはもう8年も前のことで、学校におけるコロナ禍はもちろん経験していない。教育現場の混乱や工夫はさまざまなところで見聞きしたが、教員経験があるとはいえ、そこにいる人たちが何を感じ、考えたのか、いまだに表層を撫でるような理解しかしていないように思う。

最近読んだ2冊の歌集に、コロナ禍の教育現場を詠んだ印象的な歌があった。

・画面なら触れる近さにあった顔だいぶ離れて見下ろしている　大松達知

『ばんじろう』より。感染拡大による休校とオンライン授業を経て、学校が再開されたときの歌だ。パソコンやタブレットの画面に生徒の顔が並ぶ。画面越しであることは生徒との隔たりを感じさせるはずだが、作者はそこに近さを見いだす。画面に映る顔はたしかに、生身で会うときよりも近いところにある。

肝心なのは「見下ろ」すという教壇からの位置だ。画面上であれば目の高さも同じだったのだ。コロナ禍における距離と位置が、教員と生徒の間に生じうる非対称の力関係を自覚させたわけである。

・黙食といふ新習慣にほつとする生徒ゐるらむみんながひとり　福士りか

『大空のコントラバス』より。大人数で食事することやコミュニケーションが苦手な生徒には、黙食は救いでもあろうと想像している。「みんながひとり」という措辞が、生徒たちの個性とその孤独をむしろあたたかく包み込んでいる。

歌人の洞察力がコロナ禍の非日常を経て、日常に隠れていたものを炙り出したのである。（そめの・たろう＝歌人）